相談待たず、訪問支援

公文一也さん（安芸市） 県職員から病院に

「農福」仕掛け人 民間に転職

県東部で障害やひきこもりなど生きづらさを抱える人たちを支援し、「農福連携」の仕掛け人と呼ばれる公文一也さん(49)＝安芸市東浜＝が今春、県職員から芸西村の民間病院に転職した。相談を待つのではなく、支援が必要な人のところに出向く「アウトリーチ」（訪問支援）事業に注力しようと決断した。「一つのきっかけで人は変われる。目の前で困っている人を助けたい」と話す。

公文さんは安芸市出身。岡山県の専門学校を卒業し1998年に県庁に入った。幡多福祉保健所を経て2012年から安芸福祉保健所で自殺予防などに取り組んだ。

11年の県内自殺率は10万人当たり26人で全国8番目に高く、安芸福祉保健所管内は42・25人と県内5福祉保健所別で最も高かった。

背景は貧困、孤立、健康問題などさまざま。支援には行政や警察、病院、社会福祉協議会…と多機関の連携が要る。しかし、公文さんの目にはバラバラで、ともすれば責任を押し付け合っているように見えた。

『押し付け合い』から『助け合い』に。顔の見える関係を築こう」。公文さんは率先して各機関に呼びかけ、13年に連携組織を立ち上げた。

◇

その翌年、市社協の紹介を受け、安芸市内の30代男性と出会った。10年ほど引きこもっていて、道端の草を食べるほど貧しく、同居する兄弟との折り合いも悪かった。公文さんは社協職員らと自宅を訪ね、男性が丁寧に耕した裏庭の畑に目を留めた。

所持金ゼロの男性に、ナス農家でのアルバイトを紹介した。ほ場の仕事は、人付き合いが苦手な男性の特性に合った。3カ月間、黙々と畑を耕す姿を見た農家は、男性を正規雇用。男性は数年後、ためた金で家を買って独立した。

こうした事例は人手不足に悩む農家の間で話題となり、公文さんらの仲介で生きづらさを抱える人たちが次々と農業分野で働くようになる。農業と福祉の「農福連携」という言葉が全国で聞こえだした頃。取り組みがぴたり重なった。

安芸福祉保健所管内では今、農福連携の事例に数えられる人が100人以上働く。連携はさらに、林業や水産分野にも拡大した。

一方で公文さんには新たな悩みが生じた。

◇

取り組みが進むにつれ、公文さんの下には管外からも支援依頼が届きだした。上司に相談すると「それは管轄が違うのでは」。そんなことが重なった。公文さんにとって行政の縦割りなど「どうでもええこと」。公務員という枠に限界を感じた。

昨年12月。たまたま連絡を受けた芸西病院（芸西村和食甲）のリハビリ部門責任者、加賀野井聖二さん(57)にポロリこぼした。「県庁を辞めようかと」

同病院は25年度から県の委託を受け、精神医療が必要な人への訪問支援事業を始めることが決まっていた。加賀野井さんはすぐさま「ほんなら、うちに来んかえ」と声をかけた。

公文さんは安芸での在任期間が10年を超え、そろそろ異動も考えられた。「そうなったら、新しい場所でまた〝けんか〟せないかん。その力を外に向けたい」と転職を決めた。

4月に同病院の地域生活支援室長に就き、医師や看護師らと連携して訪問支援を始めた。時には県東部を飛び出す構え。立場は変わっても、根底にある思いは変わらない。

「僕だけじゃ、なんちゃあできん。いろんな組織の良さがあって、連携すれば何とかなるし、皆で喜びを感じられる。大きいことはようやらんけど、目の前の人を助け、みんなに居場所がある地域を目指したい」

（浜崎達朗）

県庁から民間病院に転職した公文一也さん（芸西村和食甲）